

難波宮の区画施設、特に複廊について

杉本 厚典

要旨 本稿では難波宮跡でこれまでに検出されている複廊、単廊、一本柱列、築地などの区画施設を集成してそれらの規模に見られる特徴を検討した。そしてこれまでに指摘されているように前期難波宮において複廊の梁行の広狭に規則性があることを確認した。また後期難波宮の複廊は内裏が掘立柱建物で梁行8尺、大極殿が礎石建物で梁行8.5尺を測り、建物様式、規模において差があるほか、基壇幅が広いことから朝堂院南面も複廊であったと推測した。そしてそれは大極殿のものより下回る規模となることから、後期難波宮の複廊梁行にも規模の差があると考えた。さらに平安時代の回廊が様々な儀式において用いられていることから、飛鳥・奈良時代の回廊の梁行差も、建物の格式や荘厳さの演出と同時に、各種の儀礼や降雨時の臨時の座といった実面的側面を反映したものであったと推測した。

■はじめに

難波宮の区画施設は溝、「一本柱列」（掘立柱塀）、単廊、複廊、築地が知られており、片庇廊についても存在する可能性が指摘されている。中でも複廊は前期・後期難波宮の内裏や大極殿といった主要施設をとり囲んでおり、区画施設の中で最も格式が高い。複廊は古代の宮殿においてその中心となる施設を囲む回廊に用いられる廊の形式であり、小稿では難波宮で検出されている区画施設の中でもとりわけこの複廊に焦点をあてて検討を行う。

前期難波宮における複廊の規模については植木久によって規則性が明らかにされている。即ち、桁行は10尺で統一されているものの、梁行には9、8、7、6尺と広狭があり、朝堂院部分が9尺、八角殿院および内裏南面部分が8尺、それ以北は7尺、内裏後殿北面回廊が6尺というように、意図的に回廊の幅に差がつけられていることを示した。さらに、この差異が中国宋代の建築技術書『营造法式』に記されるように、宮殿建物の重要度に応じてつけられたものと考えた（植木久1998）。

また前期難波宮宮城南門東西両側の複廊については、同じ棟通りの柱筋を西側に延ばしたところで一本柱塀が検出されており、門の両側にしか設けられていないことから、これについては宮城南門の荘厳化を目的としたとの考え（中尾芳治1995）が示されている。藤原宮で朝堂院回廊の南東隅とそれに接続する朝集殿院東面回廊が複廊であったことが明らかにされ、朝集殿院に複廊がめぐりうる可能性が指摘されており（箱崎和久2004）、李陽浩は、この藤原宮との類似性に着目し、前期難波宮宮城南門東西両側の複廊が朝集殿院にめぐりうる回廊であったと推測している（李陽浩2004）。

以下において、難波宮の廊の持つ特徴を整理し、宮殿の重要な施設を囲むこれらの廊について、同

時期の他の都城や寺院と比較する。

1、難波宮の区画施設（表1）

飛鳥時代の前期難波宮では内裏と内裏前殿、八角殿院、朝堂院の周囲に掘立柱の複廊がめぐり、宮城南門東西にも複廊が存在する。既に植木・李の指摘するように、前期難波宮の複廊の桁行は10尺で統一されており、梁行は宮城南門の東西部分では9.25尺、朝堂院回廊は9尺、八角殿院回廊・内裏南面回廊は8尺、内裏前殿西面回廊・東面回廊・内裏回廊は7尺、内裏前殿区画の北面回廊は6尺と規格性を持つ。複廊に接して設けられている建物群、あるいは複廊によって囲郭される建物群が南から北に、朝集殿→朝堂→八角殿→内裏前殿・内裏と遷移するにつれて複廊の梁行が狭くなる。この梁行の差異については植木久の指摘する「建物の重要度に応じた差」であると同時に、開かれた場から宮殿深部に向かうにつれて廊の幅が狭まることを意味し、儀式に参集する貴族や各殿舎において業務を行う官人の人数といった機能的な側面も反映したものと思われる。

単廊は前期難波宮の東方官衙地域で4箇所検出されている。いずれも掘立柱の建物である。東方官衙の最も東の部分には高殿建物が建っており、この周囲に単廊SC1・5・6で構成される回廊が設けられている。SC6の西58.6m（約200尺）の位置にはSC701があり、さらにその西32.3m（110尺）においてSC3049が南北に延びる。これらの二つの単廊の南端には東西方向のSC3047が接続する。これらの単廊は梁行が約3.0m（10尺）で共通するが、SC3049とSC3047は桁行9.5尺とやや短めである。

一本柱列、即ち掘立柱塀は内裏西方官衙や難波宮南西部において多く見られる。基本的に柱間寸法は10尺であるが、それより一回り短い8尺の一本柱列SA912001・912002が朝堂院朝庭部分で検出されている。これらは南北方向に設けられており難波宮の中軸線から50尺の部分にあることが示されている（大阪市文化財協会2005、p.50）。この柱列の東側にはSB912001、SB912002の2棟の建物が南北に並んでおり、柱列と建物とあわせて一まとまりの施設と考えられている。さらにこれらの建物の柱穴が前期難波宮の建物と異なり、小規模で柱筋も整っていないことから、仮設的な施設であったと推測されている（大阪市文化財協会2005、p.53）。これらのことから、SA912001・912002は仮設建物に伴う簡易の遮蔽施設として柱間寸法が短かった可能性が考えられる。

以上のように、朝堂院や八角殿院、大極殿前殿区画、内裏では複廊が用いられるが、東方官衙では単廊、内裏西方官衙では掘立柱塀が用いられており、各区域によって区画施設に顕著な違いが認められる。

奈良時代の後期難波宮では前期難波宮と比べて、複廊で囲まれる場所がさらに限定される。即ち内裏と大極殿の四周に複廊が設けられており、朝堂院南門に接する廊は基壇のみの検出であるが、基壇幅7.9mと広く、複廊とみられる。東面・西面部分は単廊あるいは築地である。また朝集殿院が想定される場所の南西で東西方向に延びる2条の平行する溝が検出されている。両溝間の距離は約10.6mであり、南面回廊の両側側溝が延びてきている可能性が指摘されており、その場合、幅の広いことから複廊あるいは築地を持った廊であるとの考えが示されている（大阪市文化財協会1981、p.16）。

表1 (その1) 難波宮の主な区画施設 (溝以外)

掲載報告書など	報告書における名称など	時期	種類	掲載箇所	基壇幅	桁行	尺	梁行	尺	備考
『難波宮址の研究』第十二	SA801	宮以前?	一本柱列	64						NW87-21次。南北方向。前期難波宮以前?
『難波宮址の研究』研究予察報告第六	SA1884	宮以前	一本柱列	Plate4						正方位でない。
『難波宮址の研究』研究予察報告第六	SA2193	宮以前	一本柱列	Plate4						正方位でない。
『難波宮址の研究』研究予察報告第六	SA2194	宮以前	一本柱列	Plate4						正方位でない。
『難波宮跡研究調査年報 1971』「第39次発掘調査概報」	大極殿院	前期あるいは後期	一本柱列	5		2.9m	10尺			大極殿院。大極殿南端より8.5m南側で、東西方向の掘立柱列。9間分を抽出。柵の可能性。小石敷の下。
『昭和43年(第30次)難波宮跡発掘調査報告書』東方官衙	SA3044	前期あるいは後期	一本柱列	4		3.00m	10尺			
『難波宮跡研究調査年報 1975~1979.6』「第92次発掘調査概報」	中軸線の約200m西	前期あるいは後期	一本柱列	22		2.5~2.6m	8.5~9尺			3個検出。南北方向。一本柱列。一辺が100~120cm。柱痕跡底部が25cm、上で30~40cm。またこの柱列の西約7.4m(25尺)に南北溝。下層に竪穴住居(長方形プラン)。
『難波宮址の研究』第十二	SA3044	前期あるいは後期	一本柱列	43		3.01m				NW80-9次。
『大坂城址』Ⅲ(大阪府文化財センター)	柱穴列 190		一本柱列	23		2.43m				柱156が597~647calAD、柱157が529~601calAD。桁行は柱根中心間の距離。柱穴を設けるときに掘りこんだ整地層出土の須恵器蓋の型式をもとに、造営時まで遡らないと判断(p.25)。
『難波宮跡研究調査年報 1973』「第56次発掘調査概報」	SC5642	前期あるいは後期	単廊	41				約3.0m		
『昭和43年(第30次)難波宮跡発掘調査報告書』東方官衙	SC3047	前期あるいは後期	単廊	3		2.87m	9.5尺	3.00m	10尺	
『難波宮址の研究』第十二	SC3047	前期あるいは後期	単廊	43		2.83m	9.5尺	3.00m	10尺	NW80-9次。
『難波宮址の研究』第十二	SC3049	前期あるいは後期	単廊	43		2.87m	9.5尺	3.01m	10尺	NW80-9次。
『難波宮址の研究』研究予察報告第六	SA1602・1604	前期	一本柱列	86						SC1701中央から東西に延びる掘立柱柵列。
『難波宮址の研究』第九	SA301	前期	一本柱列	81		2.92m	10尺			内裏西方官衙西側。
『難波宮址の研究』第九	SA302	前期	一本柱列	81		2.91m	10尺			内裏西方官衙北側。
『難波宮址の研究』第九	SA303	前期	一本柱列	81		2.79m	9.5尺			SA301の西側。2.35~3.10mで平均2.78m、ばらつきの少ない柱間では2.79m。
『難波宮址の研究』第十二	SA701	前期	一本柱列	30		2.94m				東西方向。西側はSA703に接する。
『難波宮址の研究』第十二	SA702	前期	一本柱列	30		2.93m				柱直径0.3m。
『難波宮址の研究』第十二	SA703	前期	一本柱列	31		2.88m				NW82-10次調査で検出。南北方向。柱穴掘形から0.4m西に平行して延びるSD703あり。
『難波宮址の研究』第十二	SA704	前期	一本柱列	31		2.94m				南北方向。SA705に接する。7間て22.0m。
『難波宮址の研究』第十二	SA705	前期	一本柱列	31		2.95m				NW82-44次調査地。5間分14.7m。
『難波宮址の研究』第十二	SA706	前期	一本柱列	31		3.04m				NW82-44次調査地。7間分21.4m。
『難波宮址の研究』第十二	SA707	前期	一本柱列	32						SA706西端から北に折れたもの。
『難波宮址の研究』第十三	SA812201	前期	一本柱列	48	約2.95m	10尺				前期朝堂院北面柱列。
『難波宮址の研究』第十三	SA875401	前期	一本柱列	49	約2.94m	10尺				前期朝堂院北面柱列。
『難波宮址の研究』第十三	SA1401	前期	一本柱列	49	約3m					前期内裏西大垣。南北方向。柱の抜き取り痕跡0.6m。朝堂院西面回廊SC812201の北方延長にあたる。
『難波宮址の研究』第十三	SA912001	前期	一本柱列	50	約2.4m	8尺				南北塀。
『難波宮址の研究』第十三	SA912002	前期	一本柱列	50	約2.4m	8尺				SA912001に重複し、それを切っている。
『難波宮址の研究』第十五	SA121	前期	一本柱列	33	2.95m	10尺				東西方向。
『難波宮址の研究』第十五	SA120	前期	一本柱列	33	3.1m	やや広い				東西方向。
『難波宮址の研究』第十五	SA106	前期	一本柱列	33	2.93m	10尺				
『難波宮址の研究』第十五	SA88	前期	一本柱列	24	2.7(塀全体では3.0m)					総柱建物SB82・42を囲む柵。東西方向。
『難波宮址の研究』第十五	SA38	前期	一本柱列	24	2.91	10尺				総柱建物SB82・42を囲む柵。南北方向。
『難波宮址の研究』第十五	SA7	前期	一本柱列	30	2.92	10尺				南北方向。
『難波宮址の研究』第十五	SA3	前期	一本柱列	31	2.92	10尺				東西方向。SB14の南側。SB4の東に接続。
『難波宮址の研究』第十五	SA4	前期	一本柱列	31	2.92	10尺				東西。SB14の南側。SB4の西に接続するとされる。
『難波宮址の研究』第十九	SA706	前期	一本柱列	33	2.76m					柱間隔は15間分の平均値。
『難波宮址の研究』第十九	SA707	前期	一本柱列	36	1.7m					柱間隔が短く、小型柱穴も含まれ。SA706に付設された袖柱の短い壁と推測。
『難波宮址の研究』第十二	SA701	前期	一本柱列?建物?	64	4.9~6.1m					NW85-32次。南北方向。
『難波宮址の研究』第十二	SA702	前期	一本柱列?建物?	64	約1.8m	6尺				NW85-32次。南北方向。
『難波宮址の研究』第十二	SA703	前期	一本柱列?建物?	64	約4.0m					NW85-32次。南北方向。
『難波宮址の研究』第十二	SA701	前期の可能性	一本柱列	51	2.98m					NW89-17次。朝堂院南門の東。東西方向。
『難波宮址の研究』第十二	SC701	前期	単廊	29	2.6~3.2m(平均2.93m)、南半2.92m・北半2.88m	10尺	3.02m	10尺		南北方向。NW30次SC3046に接する。
『難波宮址の研究』第十五	SC6	前期	単廊	31	2.92m	10尺	約2.9m	10尺		SB14を囲む西面回廊。

表1 (その2) 難波宮の主な区画施設 (溝以外)

掲載報告書など	報告書における名称など	時期	種類	掲載箇所	基壇幅	桁行	尺	梁行	尺	備考
『難波宮址の研究』第十五	SC5	前期	単廊	31						SB14を囲む南面回廊。SB04の西に接続。NW150次のBトレンチ。
『難波宮址の研究』第十五	SC1	前期	単廊	25						SB14を囲む南面回廊。SB04の東に接続。
『難波宮址の研究』研究予察報告第六	SC1701A・B	前期	軒廊	86						SB1603とSB1801を結ぶ掘立柱軒廊。単廊。
『難波宮址の研究』研究予察報告第三	(内裏前殿)東面回廊	前期	複廊							
『難波宮址の研究』研究予察報告第三	(内裏前殿)東面回廊	前期	複廊							
『難波宮址の研究』研究予察報告第三	(内裏前殿)西面回廊	前期	複廊							
『難波宮址の研究』研究予察報告第五第一部	内裏回廊	前期	複廊	実測図第一						
『難波宮址の研究』研究予察報告第五第一部	大極殿回廊B	前期	複廊	93					10.5尺	
『難波宮址の研究』第七報告篇	SC803	前期	複廊	30		2.92m	10尺	2.04m	7尺	内裏前殿 SB1801の西門 SB801に取付く。南北方向。南で八角殿院回廊に接続。抜き取り穴に焼土・炭化物。8次調査では焼けた人骨片も含まれていた。
『難波宮址の研究』第七報告篇	SC2002	前期	複廊	34		2.92m	10尺	2.04m	7尺	内裏前殿東門 SB7501 北妻に取付く。
『難波宮址の研究』第七報告篇	SC7501	前期	複廊	34		2.92m	10尺	2.04m	7尺	内裏前殿東門 SB7501 南妻に取付く。
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SC1301	前期	複廊	65		約 2.92m?	10尺	約 2.4m	8尺	内裏南面東回廊。回廊の中央柱の下に木の礎板。その両側の柱跡埋土内に小石が敷き詰められた面がある。
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SC3304	前期	複廊	66		2.92m	10尺	2.34m	8尺	内裏南面西回廊。柱直径 40cm。西八角殿院の東回廊に接する。
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SC803	前期	複廊	66		2.92m	10尺	2.05m	7尺	内裏西面回廊。SB801に接続。
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SC3501	前期	複廊	67		2.76m	約 9.5尺	2.34m	8尺	西八角殿院東面回廊。内裏南面西回廊 SC3304 西端に接続。柱直径約 40~45cm。周囲に SD3503 があり、SD3502 と同様に小柱穴に切られている。
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SC3504	前期	複廊	68		2.92m	10尺	2.34m	8尺	西八角殿院北面回廊。SC4203、SC4202の西。
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SC3601	前期	複廊	68		2.92m	10尺	2.34m	8尺	西八角殿院南面回廊。
『難波宮址の研究』第十二	SC701	前期	複廊	78		2.93m	10尺	2.70m	9尺と1/4尺	NW93-5次。宮城南門 SB701の東に接続。柱の太さ0.26~0.30m。
『難波宮址の研究』第十二	SC702	前期	複廊	78		2.93m	10尺	2.70m	9尺と1/4尺	NW93-5次。宮城南門 SB701の西に接続。柱の太さ0.26~0.30m。
『難波宮址の研究』第十三	SC2202	前期	複廊	32		2.92m	10尺	2.63m	9尺	前期朝堂院西面回廊。柱痕跡は0.3~0.4m。
『難波宮址の研究』第十三	SC875401	前期	複廊	39		2.85~2.95	10尺	2.3~2.4	8尺	前期東八角殿院南面回廊。
『難波宮址の研究』第十三	SC875402	前期	複廊	39		2.85~2.95	10尺	2.3~2.4	8尺	前期東八角殿院南面回廊。
『難波宮址の研究』第十三	SC010501	前期	複廊	39		2.85~2.95	10尺	2.3~2.4	8尺	前期東八角殿院南面回廊。
『難波宮址の研究』第十三	SC010502	前期	複廊	39		約 2.7m	10尺	2.3~2.4	8尺	前期東八角殿院南面回廊。
『難波宮址の研究』第十三	SC3601	前期	複廊	42		約 2.92m	10尺	約 2.34m	8尺	前期東八角殿院南面回廊。
『難波宮跡研究調査年報 1971』第 40 次発掘調査概報	前期難波宮朝堂院東面回廊	前期	複廊	9		2.9m	10尺	2.65~2.75m	9~9.5尺	柱の太さは中央が 29cm で深く、東西のものが 27cm。
『難波宮跡研究調査年報 1972』第 45 次発掘調査概報	前期朝堂院南門西側	前期	複廊	21		2.92m	2.60m	2.60m	9尺	
『昭和 42 年(第 26 次~第 29 次)難波宮跡発掘調査報告書』第 23 次日トレンチ・26 次	前期難波宮朝堂院西回廊	前期	複廊	図面 IV		約 2.9m	10尺	約 2.6m	9尺	前期難波宮朝堂院西回廊。
『昭和 44 年度(第 34 次・第 35 次・第 36 次)難波宮跡発掘調査報告書』第 33・34 次	内裏前殿区画南面回廊	前期	複廊	3頁、図版		2.92m		2.4m		
『昭和 45 年度(第 37 次・第 38 次)難波宮跡発掘調査報告書』第 38 次	朝堂院東面回廊、複廊の東側 2 個	前期	複廊	12				2.6m		複廊を構成する東側柱穴 2 個。
『難波宮跡研究調査年報 1974』第 59 次発掘調査概報	SC5801	前期	複廊	14・図面 3		3.1m		1.75m	6尺	前期難波宮内裏前殿北面回廊。第 58 次・59 次。
『難波宮址の研究』第十五	SC5642	前期	廊	23		2.2~2.9m	7.5尺~10尺			NW56 次。「楼閣建物」の東側の区画施設。
『難波宮址の研究』第十六	SP201~216	前期	不明	10						
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SA3926	後期造営期間中	一本柱列	87		2.92m	(前期の 10 尺に相当)			小石敷の下層で灰色整地層の上面から設けていたため、後期難波宮造営段階と推定。
『難波宮址の研究』第十三	SA030802	後期?	一本柱列	60		2.2m、3.1m、2.9m				
『難波宮址の研究』第七報告篇	SA1121	後期	一本柱列	36		2.97~2.98m	10尺			内裏正殿の大安殿 SB1641A・B、大安殿前殿 SB1741A・B の西側を囲む一本柱列。北は北面回廊 SC1745。南は南面回廊に取付く。21 次調査では小型の軒瓦・瓦が出土し瓦葺の可能性。
『難波宮址の研究』第七報告篇	SA12121	後期	一本柱列	41		2.98m	10尺			
『難波宮址の研究』第十三	SA843001	後期	一本柱列	72		約 2.7m	9尺			五間門区画。
『難波宮址の研究』第十三	SA843002	後期	一本柱列	72		約 2.7m	9尺			五間門区画。
『難波宮址の研究』第十三	SA852201	後期	一本柱列	72						五間門区画。
『難波宮址の研究』第十五	SA12121	後期	一本柱列	77						阪神高速の調査区。
『難波宮跡研究調査年報 1974』第 59 次発掘調査概報	SA5842	後期	一本柱列	14・図面 3		3m	10尺			南北方向。

表1 (その3) 難波宮の主な区画施設 (溝以外)

掲載報告書など	報告書における名称など	時期	種類	掲載箇所	基壇幅	桁行	尺	梁行	尺	備考
『難波宮跡研究調査年報 1974』 「第 59 次発掘調査概報」	SA5941	後期	一本柱列	14・図面 3		2.92m	9 尺と 3/4 尺			東西方向。
『昭和 44 年度 (第 34 次・第 35 次・第 36 次) 難波宮跡発掘調査報告書』 「第 36 次」	細	後期	一本柱列	図版		3.4m				後期大極殿院西回廊の外側約 1m に南北方向に延びる。
『難波宮跡環境整備事業に伴う発掘調査 (NW00-11) 報告書』	後期朝堂院南面西回廊	後期	回廊基壇	3	(約 7.9m)					後期朝堂院南面回廊西側。基壇幅は NW86-28 次の数値を引用。
『難波宮跡環境整備事業に伴う難波宮跡 (NW86-28 次) 発掘調査略報』	後期朝堂院南面東回廊	後期	回廊基壇	2	7.9m 程度					後期朝堂院南面回廊東側。礎石など不明。大極殿院南門から SC01 中心まで 176m (600 尺)。この調査により後期難波宮朝堂院が 12 室でなく 8 室と確定した。
『難波宮跡研究調査年報 1972』 「第 42 次発掘調査概報」	SA4241	後期	築地 (片庇廊)	6・図面 3・5	約 7m	3.3~3.4m				後期難波宮西外郭。内裏・大極殿西側。花崗岩礎石 2 個と、5 個所の礎石抜き取り痕。「14 次調査東地区で検出された内裏西外郭築地片庇廊の南延長部分」(p.6)。この延長上で 15・22・25 次調査地の朝堂院西外郭築地ともつながる。花崗岩礎石は凝灰岩片や後期難波宮瓦を根石として用いる。
『難波宮址の研究』研究予察報告第五第一部	内裏外郭築垣	後期	築地 (片庇廊)	72・実測図第三	約 7m					後期難波宮西外郭。内裏西側。第 14 次調査東地区。内裏の西側。西に偏した 2 列の礎石列・瓦が土壇の東側に分布。上面レベルが瓦堆積や旧地表より高く明らかに土壇と報告。本文内では土壇幅 6m とあるが、実測図第三では 7.0m。
『難波宮址の研究』第七報告篇	SA1421	後期	築地	35						後期難波宮西外郭。内裏西側。築地の土壇。約 40cm の高まり。幅は東西両側とも攪乱で不明。第 75 次調査。
『難波宮址の研究』第七報告篇	SA1921	後期	築地	38	5.9m					後期難波宮西外郭。内裏西側。SB12121 の廃絶後に瓦をきむ土で整地し築造されていた。土壇幅 5.9m は図 18 より計測 (側溝内寸・下端部)。第 75 次調査。
『難波宮址の研究』中間報告Ⅲ (第 22 次発掘調査概報)	SA2244	後期		遺構配置図		3.267m	11 尺	2.97m	10 尺	後期難波宮西外郭。朝堂院西側。単廊状。
『難波宮址の研究』第十三		後期		83	約 5m					後期難波宮西外郭。朝堂院西側。25・26 次調査。2 条の溝間距離を計測。
『昭和 42 年 (第 26 次~第 29 次) 難波宮跡発掘調査報告書』 「第 26 次」	後期難波宮朝堂院西外郭築地塀	後期	築地	図面Ⅲ	約 4.1m					後期難波宮西外郭。朝堂院西側。東西側溝を検出。溝下端で図面計測。14 次・15 次・22 次検出の SA2244 の延長。
『難波宮址の研究』第十三	SD921701・921702・SP921702・921703	後期	築地?	82	4.5m					後期難波宮西外郭にあたる。築地本体は未検出。東西両側溝 SD921701・SD921702 間は 4.5m (図 58 より計測)。溝より 2.3~2.3m 内側にそれぞれ 1 個の柱穴。
『難波宮址の研究』第十三	SA1921	後期	築地	81	約 2.3~2.4m					当初後期難波宮東外郭とされていたが、『難波宮址の研究』第十五で回廊の一部であることが示される (高橋工 2008)。大極殿北東。基壇幅約 2.3~2.4m (約 8 尺)。礎石無く築地片庇廊かどうか調査区内だけでは不明。
『難波宮址の研究』第十五	SA1902	後期	築地片庇廊か?	77						築地と礎石があるため築地片庇廊の可能性。『難波宮址の研究』中間報告Ⅴ (第 24 次発掘調査概報)。
『難波宮址の研究』第十五	土壇	後期	土壇	77	3~4m					後期難波宮内裏の東側の区画。NW4 次等。土壇幅約 3~4m。
『昭和 41 年 11 月難波宮址の研究中間報告Ⅴ (第 24 次発掘調査概報)』 「第 24 次」	SA1902	後期	土壇と柱列 (築地片庇廊か?)		4m	2.6m	8 尺と 3/4 尺			後期難波宮内裏東築垣。SA2441 は東西方向でこれに接する。基壇幅 4m で両側に瓦堆積。SA1902 土壇東より柱穴。柱間寸法 2.6m。
『昭和 41 年 11 月難波宮址の研究中間報告Ⅴ (第 24 次発掘調査概報)』 「第 24 次」	SA2441	後期	土壇と柱列 (築地片庇廊か?)		4m	3.3~3.8m	12 尺			後期難波宮内裏東築垣に接する東西方向の土壇。SA2441 は東西 50m、土壇南より 13 個の柱穴。西から 9 間分は柱間寸法約 3.3m、これより東は 3.8m。土壇南側に、幅 70cm、深さ 30cm の側溝。
『難波宮址の研究』第十三	SA852202	後期	築地	66	約 4.5m 以下					後期朝堂院東面区画施設。北面回廊と接続する部分の調査。西側溝 SD852207 と北面回廊東妻部外側溝 SD852208 の間は 4.5m (図 46 より計測) の範囲内。
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SC3321	後期	軒廊	76	6.0m に復元					大極殿 SB1321 と大極殿後殿 SB1326 を繋ぐ軒廊。礎石遺存せず。土壇は南北長 9.5m・東西幅 6.0m に復元。

表1 (その4) 難波宮の主な区画施設 (溝以外)

掲載報告書など	報告書における名称など	時期	種類	掲載箇所	基壇幅	桁行	尺	梁行	尺	備考	
『難波宮跡研究調査年報 1975～1979.6』第130次発掘調査概報	(後期朝集院院想定地南西)	後期	幅の広い複廊か築地回廊	16	10.6m					130次Bトレンチ。第4次調査発掘その二・第5次調査で後期難波宮南北両側溝の西側延長部分をこの調査地で検出。北側溝は西外郭築地部分では暗渠になりその西方で素掘溝になる。溝間の中心距離は約11.4m(約38尺)で、大極殿院回廊幅約8.1mより広く、15次調査検出の西面築地5mと比べても広い。「幅の広い複廊か、築地と複廊の組み合わせが考えられる」(p.16)。調査当時は朝集院南面回廊と想定されていた。	
『難波宮址の研究』研究予察報告第3式	内裏東面回廊	後期	複廊	図版第27						J・K地点(第6・7次調査)。	
『難波宮址の研究』研究予察報告第参	大極殿院東面回廊	後期	複廊							K地点(第8次調査)。その他M地点(第8次調査)。	
『難波宮址の研究』研究予察報告第参	大極殿院回廊南東隅	後期	複廊							第10次調査。	
『難波宮址の研究』研究予察報告第四	内裏南面回廊	後期	複廊	実測図第一				2.38m			
『難波宮址の研究』研究予察報告第四	内裏南面回廊南東隅	後期	複廊	実測図第二				2.38m			
『難波宮址の研究』研究予察報告第四	内裏南面回廊	後期	複廊	実測図第三				2.38m			
『難波宮址の研究』研究予察報告第四	内裏南面回廊	後期	複廊	実測図第四				2.38m			
『難波宮址の研究』研究予察報告第四	内裏南面回廊南西隅	後期	複廊	実測図第五				2.38m			
『難波宮址の研究』研究予察報告第四	内裏西面回廊	後期	複廊	実測図第五				2.38m			
『難波宮址の研究』研究予察報告第五第一部	内裏回廊	後期	複廊	実測図第一							
『難波宮址の研究』研究予察報告第五第一部	大極殿回廊A	後期	複廊		93	約8.9m			8尺	基壇幅約8.9m。	
『難波宮址の研究』研究予察報告第六	SC1745・SA2145	後期	複廊		83		2.98m	10尺	2.23	7尺	大安殿北面複廊。
『難波宮址の研究』第七報告篇	SC1021	後期	複廊		35		2.98m	10尺	2.38m	8尺	内裏南面回廊、2区の柱抜取り穴から重圓文軒瓦を含む多数の屋瓦が出土。
『難波宮址の研究』第七報告篇	SC621	後期	複廊		37		2.98m	10尺	2.38m	8尺	内裏東面回廊。回廊西側柱より約1.8m外側に瓦堆積。
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SC1323	後期	複廊		79	約8.8m			2.51m	8.5尺	大極殿院北面東回廊。土壇幅約8.8m(図4より計測)。これに伴う雨落溝はSD1324・SD1325。
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SC3324	後期	複廊		80	約8.85m			2.51m	8.5尺	(復元案:後殿取り付きから10尺×1間、12.75尺×8間、8.5尺×2間) 大極殿院北面西回廊。土壇幅約8.85m。雨落溝内側石=地覆石として、地覆石外側間約8.9m。これが回廊の基壇幅。これに伴う雨落溝はSD3325・SD3326 礎石建物。雨落溝中心間距離9.35m。
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SC3524	後期	複廊		84	約8.8m	北から3.65m・3.89m・3.10m		2.51m	8.5尺	大極殿院西面回廊。土壇幅約8.8m(図6より計測)。雨落溝中心間距離9.35m(北面回廊と同一値)。これに伴う雨落溝は東側がSD3525・西側がSD3526。
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SC3921	後期	複廊		85						大極殿院南面回廊。南面回廊の北側の雨落溝はSD3925。
『難波宮址の研究』第十 後期大極殿院地域の調査	SC3924	後期	複廊		85						大極殿院南面回廊。
『難波宮跡研究調査年報 1971』第39次発掘調査概報	大極殿院南面回廊	後期	複廊		4						大極殿院南面回廊。礎石の掘え付け痕跡とみられる穴(東西2.3m以上、南北約1.9m)。回廊基壇の幅を9mに復元すると穴は中軸線上に位置する。西回廊の穴と大きさが異なる。側溝の掘形の幅1.6mで、北・西側溝と比べて広い。
『難波宮跡研究調査年報 1974』第59次発掘調査概報	SC1745 後期難波宮内裏北面回廊	後期	複廊	14・図面3							後期難波宮内裏北面回廊。
『昭和40年(第20次・第21次)難波宮跡発掘調査報告書』第21次	SC2148	後期	複廊		5		2.98m	10尺	2.20m		内裏内郭南部を画する北面の廊。
『昭和44年度(第34次・第35次・第36次)難波宮跡発掘調査報告書』第33・34次	大極殿院北面回廊	後期	複廊	3頁、図版		8.9m			3.1m		後期の後殿に取り付く回廊。基壇幅8.4m(羽目石の内側間)、8.9m(羽目石の外側間)。
『昭和44年度(第34次・第35次・第36次)難波宮跡発掘調査報告書』第36次	大極殿院西面回廊	後期	複廊	9頁、図版		3.75m			2.4m		南北方向。礎石抜取り穴、東西の側溝を検出。
『難波宮址の研究』第十三	後期朝集院南面東回廊 SC862801	後期	複廊?		66	約7.9m					基壇状高まりの南北幅7.9m程度。
『難波宮址の研究』第十三	後期朝集院南面東回廊 SC001101	後期	複廊?		66	(約7.9m)					
『難波宮址の研究』第十三	SB010501	後期	複廊?		81	約2.3、約2.9～3.0m	8尺、10尺	約2.1～2.2m	7尺か?		SA1921下層。
『難波宮址の研究』第十三	SC852201	後期	不明		66	規模不明					後期朝集院北面回廊。大極殿院南面東回廊SC3921を東に延長した部分。
『難波宮址の研究』研究予察報告第五第一部	朝集院西側回廊	後期			86						基壇幅5.0m。北端で7.0mに拡がる。

築地や築地片庇廊とみられる土壇状の高まりは内裏西外郭、後期内裏の東隣区画で検出され^(註1)、朝堂院東面区画施設、朝堂院西側の西外郭では築地両側の溝が見つかっている。西外郭の基壇幅は北側が広く、内裏・大極殿の西側で約7m、朝堂院西側では4～5mを測る。また、内裏東側の第14次調査地・内裏・大極殿西側の第42次調査地で検出された西外郭の遺構は礎石の配置から築地片庇廊と推定されており、西外郭の区画施設が内裏・大極殿・朝堂院といった各施設に対応して形状を変える可能性もある。

2、複廊の変遷

飛鳥時代以降の宮殿における区画施設において整理しておきたい。前期難波宮造営前と造営直後の飛鳥地域において、推古天皇の小墾田宮、豊浦宮、舒明天皇の岡本宮、皇極天皇の板蓋宮、斉明天皇の後岡本宮について遺構の様子が明らかにされている。橿原考古学研究所によって行われた飛鳥宮跡の調査では、Ⅰ期、Ⅱ期、ⅢA期、ⅢB期の時期の建物・区画施設が検出されており、それぞれ岡本宮、板蓋宮、後岡本宮、浄御原宮と比定されている（橿原考古学研究所 2008）。

飛鳥宮Ⅰ期・Ⅱ期が前期難波宮よりも古くに建てられた宮殿である。飛鳥宮Ⅰ期では掘立柱建物と柱列が検出されており、いずれも正方位をとらず北で約20°西に振る。飛鳥宮Ⅱ期になると、Ⅰ期と異なり正方位に則った配置の掘立柱塀が検出されている。西の区画施設（SA6204、SA6202、SA6203）、南の区画施設（SA7907とその南側の石組溝SD7908）、東の区画施設（SA7407、SA7408）がそれにあたり、これらに囲まれた東西約193m、南北198m以上の区画が宮殿の中核部分とされる。またSA7907の南側には石組溝SD7908が掘立柱塀に平行して延びており、雨落溝と想定されている。掘立柱塀の柱間寸法は2.4m（8尺）を測る。西の区画施設は3条の柱列（SA6204、SA6202、SA6203）であるが、梁行がそろわないために複廊としては復元されていない。

また前期難波宮造営以前に建立・あるいは建立途中の寺院は、飛鳥寺、四天王寺、法隆寺、吉備池廃寺（百濟大寺）、山田寺などがあるが、よく知られるように、これらの寺院の回廊は単廊である。以上のように、前期難波宮以前に複廊が使用された宮殿や寺院は現在のところ認められない。このことは複廊が前期難波宮において初めて回廊として採用された可能性が高いことを意味する。

次に、前期難波宮と同じ時期に営まれた宮殿の区画施設について検討しておきたい。前期難波宮造営直後に営まれた宮殿として斉明天皇の後岡本宮があり、飛鳥宮ⅢA期の遺構群とされている（橿原考古学研究所 2008）。

飛鳥宮ⅢA期の遺構群の中には一見、複廊と思われる柱列が存在する。内郭北区画と内郭南区画を画する東西方向の3条の掘立柱塀（SA7904・SA7120・SA7116）がそれである。それぞれの柱列は2.4m、3.3m隔てて設けられており、柱間寸法はいずれも約2.7m（9尺）である。しかし、報告書の中では梁行の柱筋が一致しないために複廊としては復元されていない。

また、正殿を取り囲み、門SB8010とともに内郭南面を区画するSA8020（同上、pp.89-91）はその南北に平行して延びる溝までの距離が長く、複廊説（小澤毅 2003、pp.118-122）が提出されている。

両側柱筋が見つかっていないことから、木製の土台（角材）を置き、その上に柱を立てて複廊にする復元案である。一方、この遺構に対しては、軒支柱をつけず、中央の柱だけで大屋根を支えたとの見解が調査者から示されており、評価は定まっていない（橿原考古学研究所 2008、p.141—註4）。以上のように飛鳥宮ⅢA期において確実に複廊と呼べるものは指摘されていない。

大津宮以降は複廊が顕著である。667年から672年に営まれた大津宮では内裏南門の東西で掘立柱の複廊が確認されている（林博通 2001）。7世紀末葉の藤原宮では内裏・大極殿院・朝堂院・朝集殿院で掘立柱の複廊が見ついている。藤原宮では、複廊に瓦葺が採用され、礎石建で基壇を持つ。規模も桁行4.2m（14尺）、梁行3.0m（10尺）を測り、前期難波宮に比べて桁行が広がっている。また、内裏・大極殿院・朝堂院と複廊の桁行14尺・梁行10尺であるのに対して、朝集殿院をめぐる複廊（朝集殿院東面回廊）は桁行10尺・梁行12尺を測り、桁行を短くして梁行を長く取っている（箱崎和久 2004）。さらに朝集殿院複廊の梁行12尺は藤原宮の複廊の中で最も幅が広いことは注目される。前期難波宮においても、朝集殿院の南側に設けられた宮城南門東西部分の複廊が最も幅を持っており、朝集殿院に面する部分の複廊梁行が他の部分よりも広いことは一致する。

また、山田寺以降、造営された飛鳥時代の寺院は、坂田寺、本薬師寺、文武朝大官大寺などがあるが、いずれも単廊であり、文武朝大官大寺では、金堂や塔などの周囲には単廊が巡る。川原寺では西渡廊が複廊形式であり、これが寺院の中で飛鳥時代に遡る可能性がある唯一の例といえる（奈良国立文化財研究所 1981）。

奈良時代になると平城宮や各寺院において複廊が盛んに使用される。平城宮では第1次大極殿院において築地回廊、中央区朝堂院では複廊の回廊を採用している。また第2次大極殿には複廊がめぐり、その北に位置する内裏と内裏の西側に並ぶ西宮は築地回廊で囲まれる。また平城京内の左京二条二坊十一坪・十二坪では、正殿と池を囲む複廊が検出され、正殿の規模や苑池を設けることから、天皇の離宮であった可能性が指摘されている。

大規模な寺院の中心伽藍の回廊にも複廊が盛んに使用され、平城京初期に創建された元興寺、大安寺、薬師寺、興福寺、中期以降に建てられた東大寺、西大寺、西隆寺で複廊が検出されている。

784年から793年に営まれた長岡宮においては大極殿院回廊が複廊である。2010年度の発掘調査成果などから、創建段階で、内裏（西宮）が朝堂院の西に位置していた可能性が高いと判明している。この調査では掘立柱の複廊が検出され、柱間10尺という規模が後期難波宮内裏の複廊と一致することが指摘されている（國下多美樹・松崎俊郎・中島信親・吉野秋二・山岸常人 2011）。

以上のように飛鳥時代から奈良時代にかけて、複廊の使用が寺院にまで拡大する一方で、平城宮以降はそれより堅牢な築地回廊が内裏や大極殿などの最重要施設において標準になる。このような状況から築地回廊を最も格式の高いものとして、複廊、単廊といったランクがあったと推測される。

3、区画施設の種類と基底部幅

区画施設の形態の判明する飛鳥・奈良時代の宮殿・寺院の主な事例をもとにして、基底部幅（下端

部幅)を検討した(表2)^(註2)。区画施設には築地、大垣、単廊、築地回廊などがある。また築地の片面に庇を架けた築地片庇廊とみられるものもある^(註3)。築地および大垣の基底部幅は1.2~2.7m、単廊が5.4~8.4m、複廊が9.4~10.8m、築地回廊が10.8~12.0mと区画施設の種類によって基底部幅の違いが顕著である。単廊は坂田寺や吉備池廃寺などの5.4m幅のものから文武朝大官大寺の8.4mまで規模の差が大きい。このため同じ単廊でも建物の格式や用いられる場所によって違いがあったと推測される。また、平城宮兵部省東面築地は単廊と片庇廊の二案が示されている。築地回廊は平城宮大極殿地域では10.8mであるのに対し、内裏地域では11.0~12.0mと一回り大きい。

次に基底部幅から後期難波宮の複廊の位置づけを検討したい。後期難波宮内裏回廊・大極殿院回廊は複廊であり、梁間8.5尺、基壇の幅は8.6~8.9mであった。これらの基壇幅は基底部幅最大の単廊である文武朝大官大寺8.4mや、平城宮兵部省東面の単廊あるいは築地片庇廊に復元される5.76~6.1mよりも広いが、平城京城最小の複廊である西隆寺回廊9.4m(復元値)よりも狭く、複廊の中では最も基壇の幅が小さい。想定される梁行8.5尺の寸法についても、飛鳥時代の川原寺の6尺や、奈良時代後期の西隆寺の8尺と比べて広いが、平城宮Ⅱ・Ⅲ期の内裏正殿の北面回廊SC254の10尺、興福寺の12尺、薬師寺の10尺よりも狭い。以上より、後期難波宮の内裏、大極殿院、朝堂院南面の複廊の規模は平城宮や平城京内の主要官寺のものより小さいと考えられる。また朝堂院南面回廊の基壇幅は7.9mで複廊の可能性を指摘したが、これは難波宮のみならず平城宮や平安京内の複廊の中で、最も基壇幅が狭い部類のものとなる。一方、朝集殿院想定地の南西部で検出された東西溝が朝集殿院の南面回廊の側溝と連続するものとすれば、10.6mの基壇幅で後期難波宮の中で最大となり、平城宮Ⅱ~Ⅳ期内裏正殿北回廊と同じく、複廊のなかでは最大規模の部類に入ることになる^(註4)。

植木久によって後期難波宮の内裏・朝堂院の各殿舎が平城宮(平城宮第二次地区上層遺構)のものよりも規模の小さいことが指摘されている(植木久1991、pp.32-33)。このような殿舎小型化の傾向に合わせて後期難波宮の内裏・朝堂院の廊がひとまわり小さくなったと考えられる一方で、朝集殿院南面部分のみ大型に復元される可能性があり、今後のより確かな調査成果をもとに検討する必要がある。

■おわりに一回廊の用いられ方

箱崎和久は回廊の機能について、通行、隔壁、儀式の座の三つを指摘されている(箱崎和久2007)。このうちの儀式の座について若干触れておきたい。裏松光世『大内裏図考証』によると、回廊が様々な儀式に用いられていたことがうかがえる。朝集殿院南門にあたる応天門では、「貞観儀式朝賀日、隼人司、官人二人、史生、率大衣二人、番上隼人三十人、今来隼人二十人、白丁隼人一百三十二人、分陣応天門歩廊之左右、並執楯槍、座胡床」(『大内裏図考証』第一、p.195)とあり、朝賀の儀式において180人余りの隼人が応天門両側の歩廊に参集して胡床に着席したことがわかる。また朝堂院南門にあたる会昌門東西の廊は、大嘗祭の参斎場所となっている他、千僧御読経の際に諸僧らが行導する通路となっている(同上、p.177)。この行事において、大極殿西軒廊の南側を西に向かい、壽成門から

表2 飛鳥・平城における主な廊の基壇・築地

遺跡名	出典	掲載頁	遺構名称	遺構番号	種類	基壇幅(m)	築地基礎部幅(m)	築行寸法(m)	備考
西隆寺	『西隆寺』	40	東面築地	SA420	築地		1.2		
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XI	55	III期東面築地塙	SA3800A・B	築地		1.5		SA3800Aは第III期当初の東面築地、第II期の東面築地回廊をひきつぎ、回廊部分を撤去。
平城宮	『平城宮発掘調査報告』IX	82	内裏地区築地回廊築地基礎部		築地回廊の築地部分		1.5		
平城宮	『平城宮発掘調査報告』IX	183	東面築地		築地		2.4		
平城宮	『平城宮発掘調査報告』IX	82	内裏外郭東を画する築地		築地		2.4		
平城宮	『平城宮発掘調査報告』IX	82	宮大垣基礎部幅		宮大垣		2.7		
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XI	54	第1次大極殿地区III期南面築地塙	SA3810B	築地	5			第II期の回廊基壇を南北とも約4m縮めたもの。p.96, fig.52より計測(本文中では基壇幅4m内外)。
坂田寺	(稲崎和久 2003, p.188-Tab14)		大膳職地区II期南面回廊	SA109	築地基壇	5.28		3.03	
吉備池原寺	(稲崎和久 2003, p.186-Tab14)		南廊		南廊	5.4		3.0~3.4	
西天王寺	(稲崎和久 2003, p.186-Tab14)		南廊		南廊	5.4		3.94	
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XII	61	西面大垣	SA1600	大垣	5.4~5.7			
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XIII	53	II-III期内裏正殿SB450Aの東回廊	SC247	単廊	5.52		3	PLAN7より計測。内裏正殿を囲むもので、内裏全体はII期に据立柱塙、III期に築地回廊がめぐると考えられる。単廊案と片匠廊案がある(釜井健 2005, p.206)。SG254は複廊(内裏正殿北回廊)。
禰寺	(稲崎和久 2003, p.186-Tab14)		南廊		南廊	5.76		2.73	南築基壇を区画計測。廊下部分の(基礎)幅は2.64m。東面築地SA13720の内側に平行して南北に伸びており、SA13720の内側に取付く廊としていられる。単廊案と片匠廊案がある(釜井健 2005, p.206)。基壇幅は図版15より計測。
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XVI	68	兵部省東面築地	SC13735	片匠廊/築地単廊	5.76~6.1		3.25	
法隆寺西院	(稲崎和久 2003, p.186-Tab14)		南廊		南廊	6.1		3.7	
飛鳥寺	(稲崎和久 2003, p.186-Tab14)		南廊		南廊	6.12		3.64	
川原寺	(稲崎和久 2003, p.186-Tab14)		南廊		南廊	6.43		3.82	
山田寺	『山田寺』	457	回廊基壇	単廊	単廊	6.48			
川原寺	『川原寺』、『川原寺域北限の調査』	10	西渡廊	西渡廊	複廊	6.74		3.84	礎石・瓦葺。火災で焼け落ちた痕跡あり。飛鳥時代の可能性のある複廊。「奈良時代に遡るとすれば、寺院に用いられた複廊の初例」(p.10)
文殊朝大智大寺	(稲崎和久 2003, p.186-Tab14)		南廊		南廊	7.1		3.7	
藤原宮	寺崎浩一・小澤敏・藤原浩子『奈良地区の遺跡』第100号、『奈良国立文化財研究所年報』2008pp.58-69	8	藤原宮朝堂院東面回廊		複廊	約9.3m		3.0m(10尺)	礎石建ち。図4より計測、SD8975からSD9002まで。
藤原宮	高田真次・稲崎和久『大極殿院南門の調査—第148次』、『奈良国立文化財研究所紀要』2008pp.58-69	62	藤原宮大極殿院南面東回廊		複廊	約9.3m		3.0m(10尺)	礎石建ち。図67より計測。SD8999からSD9001まで。いずれも内側の下端で計測。
西隆寺	『西隆寺』	35	回廊(複廊)	SC300	複廊	9.4		8尺(2.4m)×2間	基壇は残っており、p.107の1/2000復元図よりの復元敘述。
藤原宮	『奈良国立文化財研究所年報』2000-II	8	藤原宮朝堂院北面回廊	SC9000	複廊	約9.6m		3.0m(10尺)	礎石建ち。図4より計測、SD9001からSD8999まで。いずれも内側の下端で計測。
薬師寺	『薬師寺』	68	南面回廊		複廊	9.8		5.98	
興福寺	『興福寺第I期境内整備事業にともなう発掘調査概報』III-IV		北面回廊	SC7510	複廊	10.2		3.55m(12尺)	
薬師寺	『薬師寺』	68	東面回廊		複廊	10.3		5.98	基壇幅34尺、築行10尺+10尺、基壇の出はそれぞれ7尺。
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XIII	40	II~IV期内裏正殿北回廊	SC254	複廊	10.6		3	PLAN12より計測。内裏正殿を囲むもので、内裏全体は築地回廊がめぐると考えられる(p.410, fig.102)。
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XVII	64	大極殿院西面築地回廊	SC13400	築地回廊	10.8		7.1	
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XI	41	一期第一次大極殿地域東面築地回廊	SC5500	築地回廊	10.8			
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XI	44	二期築地回廊	SC5600	築地回廊	10.8			
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XI	50	I期北面築地回廊	SC8098	築地回廊	10.8		7.08	
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XI	50	II期南面築地回廊	SC3810A	築地回廊	10.8			
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XVII	62	大極殿院南面築地回廊	SC7820	築地回廊	10.5~11.0(10.5尺)		7.09	断面図より計測。参考 SC5600。
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XIII	56-390	III~VI期内裏外郭北面築地回廊	SC060	築地回廊	11.55(38.5尺)	6尺	13尺	
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XIII	57	III~IV期内裏外郭東面築地回廊	SC156	築地回廊	11.66		13尺×2間	p.410の模式図から。本文中は尺で表記。築地基礎幅6尺、柱間寸法築行桁とも13尺。
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XIII	64-390	III~IV期内裏外郭南面築地回廊	SC640	築地回廊	11.9			p.411の復元図を500分1にして算出。築地幅6尺。桁行は不規則(p.64)。
平城宮	『平城宮発掘調査報告』XIII	390	III~IV期内裏外郭東面築地回廊	SC156	築地回廊	12			p.411頁の復元図を500分1にして算出すると12m。

北に出て、宣光門を通り南下、蒼龍楼を通過し、白虎楼を経て大極殿へと、大極殿院と朝堂院の回廊の内側の通路を時計回りに一周したことが記されており、複廊の内側と外側とで使い分けが行われていたことが読み取れる。

大極殿とその北面回廊中央の昭慶門に至る回廊部分についても儀式時の座として用いられており、(江家次第)「祈年穀御装束曰、昭慶門東廊、嘉喜門以西五間之内、西四間、為公卿座」(同上、p.154)、(中右記)「又曰、天仁元年十一月廿三日、大嘗会依可有御神樂事、人々廻大極殿西面方、小安殿南廊、供御装束、(中略)、南廊皆敷指筵、東西壁下、敷畳、為公卿座、対座每柱、打燈蓋供灯」(同上、p.136)の記録から、祈年穀や大嘗会の儀式時に公卿の座として整えられたことが読み取れる。さらに(兵範記)「仁安元年十一月十五日、北廊内、自東三箇間南面、為太師局、嘉喜門以西五箇間、南北両面、為撰御直廬」(同上、p.156)とあり、細長い空間である複廊に南面／北面の使い分けがあったことが知られる。

饗宴の場であった豊楽院でも廊が儀礼に用いられた事例を挙げることができる。(北山抄)「長和元年、大嘗会記曰、大外記申云、最初雨儀例、代々無所見、在府以下定之、上達部標、可立東廊、逢春門以北、諸大夫標、可立顯陽承觀兩堂」(同上、p.289)とあり、大嘗祭の節会で雨天の際、諸大夫が顯陽堂と承觀堂に、また上達部が逢春門以北の東廊にそれぞれ席が設けられていたことが記されている。

このように平安時代に下るものの、回廊が各種の儀礼や降雨時の代替場所として使われていたことが明らかであり、儀礼空間の一部として回廊を位置づけることができる。さかのぼって飛鳥・奈良時代の宮殿回廊も、日常的な政務、各種の儀礼、使節謁見等の儀式といった様々な場として使用されていたことが推測される。このような回廊の機能的・運営的側面と形態との関係は必ずしも明らかにされているとは言えず、回廊の形式・規模・形状の差異について、建物の格式や荘厳さの演出といった説明に加え、儀式や宮廷内での諸活動の場としての視点から、さらなる検討が必要であると考えられる。

註

- (1) 後期難波宮の築地基底部幅はNW02-8次調査のSA1902が2.3～2.4m(8尺)である(大阪市文化財協会2005、p.81)。『延喜式』「木工寮」築牆によると、築地塀は高さが7尺から1丈3尺まで7種類あり、「本徑」を築地の基底幅と理解すると3尺、4尺、4尺5寸、5尺5寸、5尺6寸、6尺のカテゴリーが認められる。基準尺についてはここでは触れないが、後期内裏の東隣区画の築地塀が延喜式に記された中でも、大型の部類に入るとみられる。
- (2) 表2を作成するにあたり、一部のデータについて(箱崎和久2003、Tab.14回廊の梁行寸法と基壇・雨落溝の関係)を引用した。引用したデータは表2の出典に記している。
- (3) 片庇廊についての復元については(金井健2005、p.207)を参照されたい。
- (4) 後期難波宮朝集殿院の南面回廊である可能性は(中尾芳治1995、p.126)等に指摘されている。

引用・参考文献

- 植木久1991「大和への玄関―難波津」『新版古代の日本5 近畿Ⅱ』 pp.17-38 角川書店
- 植木久1998「前期難波宮の造営年代に関する一考察―他宮殿との比較から―」『大阪の歴史と文化財』創刊号 pp.13-21
- 裏松光世『大内裏図考証』（『新訂増補故実叢書』26～28、明治図書、1952）
- 小澤毅2003「飛鳥浄御原宮の構造」『日本古代宮都構造の研究』 pp.115-153 青木書店
- 橿原考古学研究所2008『飛鳥京跡』Ⅲ
- 金井健2005「建築遺構の復元」独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告』XVI pp.197-209
- 國下多美樹・松崎俊郎・中島信親・吉野秋二・山岸常人2011『長岡宮推定「西宮」』向日市埋蔵文化財調査報告書第91集 財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 國下多美樹2011「長岡宮朝堂院西方官衙の性格～複廊遺構の評価をめぐって～」『長岡宮推定「西宮」』向日市埋蔵文化財調査報告書第91集 財団法人向日市埋蔵文化財センター pp.101-113
- 財団法人 古代学協会・古代学研究所1994『平安京提要』
- 高橋工2008「後期難波宮宮殿東方地域の概観」『難波宮址の研究』第十五 pp.76-81
- 奈良国立文化財研究所1981『川原寺発掘調査報告』
- 奈良国立文化財研究所1987『薬師寺発掘調査報告書』
- 中尾芳治1995『難波宮の研究』吉川弘文館
- 大阪市文化財協会1981「第130次発掘調査概報」『難波宮跡研究調査年報1975～1976.6』 pp.10-20
- 大阪市文化財協会2005『難波宮址の研究』第十三
- 箱崎和久2003「堂塔の建築的考察」独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所『吉備池廃寺発掘調査報告 百済大寺跡の調査』 pp.178-192
- 箱崎和久2004「朝堂院東南隅・朝集殿院東北隅の調査―第128次」『奈良文化財研究所紀要』 pp. 90-99
- 箱崎和久2007「回廊」小野正敏・佐藤信・館野和己・田辺征夫編『歴史考古学大辞典』吉川弘文館
- 林博通2001『大津京跡の研究』思文閣出版
- 村井康彦・瀧浪貞子1996「大内裏の構造と変遷」財団法人陽明文庫編『記録文書篇別輯 宮城図』解説 pp.98-178
- 宮本長二郎1986『平城京』草思社
- 李陽浩2004「第3節 前期難波宮宮城南門および複廊の建物について」『難波宮址の研究』第十二 pp.181-192

Structures which divided the Naniwa Palace into sections, in particular the compound corridors

SUGIMOTO Atsunori

This paper examined the feature and scales of structures which divided the Naniwa Palace into sections excavated at the Naniwa Palace site until now, by collecting such as the compound corridors, the simple corridors, the pillared fences, and the tamped-earth walls with roofs (Tsuiji). The compound corridor is a type of corridor. This corridor is characteristic as the two passages with one roof. And it ascertained that the width of beam of compound corridor had the regularity in the Former Naniwa Palace as pointed out until now. Moreover, in time of the Latter Naniwa Palace, the beam's width of the compound corridor with embedded pillars measures 8 shaku around the Imperial Domicile, and 8.5 shaku around the Imperial Audience Hall with pillar base stones. The foundation of corridor placed at the south side of the State Halls Compound is assumed as a base of a compound corridor. And this corridor is narrower than that of the Imperial Audience Hall. From these archaeological evidences, it becomes the conclusion that there were differences in a building style and a scale in the compound corridor of the Latter Naniwa Palace. Furthermore, from the documents of Heian period, the corridors of the Heian period were used in various ceremonies, it was surmised that the beam's width of the corridor of Asuka and the Nara period had been represented the practical roles as various kinds of courtesy and extraordinary seats at the time of rain, while the social status of a building and the magnificence of the court.